

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520159

研究課題名(和文)「文化的自由の為の会議」から検証する、現代音楽における「政治性」

研究課題名(英文)"Congress for Cultural Freedom" and its music-related activities: defining musical "modernism" through the Cold War

研究代表者

福中 冬子 (FUKUNAKA, Fuyuko)

東京藝術大学・音楽学部・准教授

研究者番号：80591130

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、米国中央情報局から秘密裏に資金提供を受けていた多国籍団体「文化的自由のための会議」の音楽関連活動を通じ、冷戦期における西側の「インテレクチュアル」が、共産主義の「危機」をいかにして定義し、あるいはそれに肯定的・否定的に向き合ったのかを探ることで、クラシック音楽の創作と受容のプロセスが政治からどのような方向付けを受け、あるいはその文脈付けに加担したのかを検証するものである。様々な一次・二次資料の調査・研究を通じて、戦後西側諸国の音楽家たちが、「共産主義」や米国式「民主主義」を自在に、時には恣意的に解釈することで、自身の音楽観における「自由」を担保してきたことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study has examined the impact of the cold war and its derived ideology (political and non-political) on the creation and reception (ie. the historiography) of music, through the case study of the Congress for Cultural Freedom and its music-related events. Close examination of various documents, preliminary and otherwise, has revealed that the activities of the Congress were only one manifestation of the complex and often contradictory stance taken by many composers and musicians in the west toward what creative "freedom" would amount to on the face of the increasing antagonism between the US-led Western allies and the Soviet and its satellite states.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：戦後音楽文化 冷戦

1. 研究開始当初の背景

1950年の設立後、隆盛期には日本を含む30以上の国にまたがり活動を繰り広げた多国籍民間団体「文化的自由の為の会議」は、文学や美術、音楽などの「非政治的分野」において反ソヴィエト、反共産主義に根付く「文化と思想の自由」のイデオロギーを藩種する目的の下、定期刊行物の出版や、各界の有識者を招いてのシンポジウム、美術作品の展示会の主催などを、ヨーロッパを中心としてアグレッシヴに行った。その活動は1966年から翌年にかけて、秘密裏の資金提供を含むCIA(米国中央情報局)の直接関与が暴露され、1967年に新組織・新名称のもと、新たなスタートを切るまで続けられている。中でもロシア系アメリカ人の作曲家ニコラス・ナボコフに牽引され4回にわたって行われた音楽祭は当時を代表する作曲家や演奏家を巻き込んで大規模に行われ、「自由会議」の活動の中心に位置づけられた。

「自由会議」がその文化活動において現代音楽とりわけ高度な数値的オペレーションと抽象化された音世界に特徴付けられる「トータル・セリー音楽」と呼ばれるジャンルを含む、極度に専門化された前衛音楽

を擁護したという事実は、第二次大戦後のヨーロッパ音楽の出発点自体が、互いに相容れない創作美学間の拮抗になりたっていた、という認識に照らし合わせても非常に興味深い(Inge Kovacs, *Im Zenit der Moderne: Die Internationalen Ferienkurse für Neue Musik Darmstadt*, 1997)。

他方、米国中央情報局による「自由会議」への直接関与の露呈は当時、そのスキャンダル性ばかりが強調されることになり、結果として、音楽という「社会的営み」に必然的に潜在する政治性を巡る包括的な議論へとは発展しなかった。他方「自由会議」の活動は、独特の意味作用構造をもつ芸術体である音楽でさえも、冷戦という、軍事・イデオロギ

一両者における複数国家間の極度の緊張状態が、バイパスすることはなかったという事実が示す、その時代の特殊性を証明する事象として、理解されるべきであろう。

2. 研究の目的

本研究は、「文化的自由のための会議 The Congress for Cultural Freedom」(以下「自由会議」と略)が、冷戦期にヨーロッパ、アメリカ、アジアで展開した音楽活動の詳細を明らかにすることを通じ、第二次大戦後のクラシック音楽における「モダニズム」という概念を構築したレトリックとその背後にある動機を、外音楽的な、より広い枠組みにおいて考察することを目的とした。平成20年度に行った科学研究費補助金による奨励研究(「文化的自由のための会議」から考察する、冷戦期現代音楽における外音楽的レトリック・課題番号20901007)の結果を受け、本研究は、より広範囲な一次資料(とりわけ、「自由会議」の議事録や内部メモ、当事者の活動に関する一次資料など)の調査・研究を通じて、17年にわたった会議の活動の包括的な理解の獲得を目指した。また、前回の研究では範囲外だった、「自由会議」が主催した4回目の音楽祭である「東京世界音楽祭」(1961年)の経緯、内容、受容を巡る考察を通じ、戦後日本における「現代音楽」という領域において、政治との「交差」によりどのような音楽的・外音楽的作用が生まれたのかを巡る認識を獲得することも、本研究の目的のひとつであった。

3. 研究の方法

本研究では、平成20年度科学研究費助成金による奨励研究として行った「「文化的自由の為の会議」から考察する、冷戦期現代音楽における外音楽的レトリック」の結果を受け、「自由会議」関連の一次資料のより詳細な調査を通じて、その活動を支えた動機、意思決定の経緯、音楽家との意

見交換から浮かび上がる「自由な文化」という概念を明らかにするとともに、音楽家（ストラヴィンスキー含む）が理解したところの「自由会議」の意図、および50年代終わり・60年代初頭の邦人音楽家による「自由会議」主催イベントの受容を検証し、より広い文脈から「自由会議」による事業が現代音楽の創作・受容において果たした「貢献」を考察した。一次資料としては、在ワシントンの国立公文書館および議会図書館所蔵資料（「会議」議事録や関係作曲家の資料）、ニューヨーク市立図書館所蔵資料（コープランド、カウエル関連資料）、在スイスのパウル・ザッハー財団所蔵資料（ストラヴィンスキーおよびブーレーズ関連資料）、東京文化会館資料室所蔵資料等を調査した。

4. 研究成果

東西冷戦構造が、「インテレクチュアル（アナトール・フランスがドレイフス事件に関連して定義付けを行った、特定の政治団体や政治的信条への忠誠を標榜することなく、自らの専門領域から広く社会・政治的アクチュアリティに注釈を行う立ち位置を持つもの、という意味において）としての音楽家にどのような創作的作用を与えたのかを探るべき、ケース・スタディーとして「文化的自由のための会議」に焦点を定めたが、3年に亘る調査研究から明らかになったのは、とりわけフランス人音楽家を始めとする「会議」関連活動への反動的姿勢は、「会議」自体への呼応としてではなく、むしろ、「共産主義」や米国式「民主主義」を自在に、時には恣意的に解釈することで、自身の音楽観における「自由」の担保への試みの一事象である、という事実である。さらに言えば、冷戦期における西側の音楽家が、共産主義の「危機」をいかにして定義し、あるいはそれに肯定的・否定的に向き合ったのかを探るためには、「会議」のよ

うに明らかに米国政府の息のかかった活動への反応のみならず、当時自国内に存在した、政治的スタンスをとるうえでの「指針」と見なされていた様々な現象（特定の批評家や文学潮流、文芸雑誌への裏書や、それが社会的に何を意味するのかを巡る意識、あるいは作品を含む音楽文化の解釈作業や研究学派など）との相関図において記述されるべきであることが明らかになった。後者に関しては研究者が当該期間内に発表した研究（単著1本、刊行論文3本、および口頭発表1本）を通じて公にした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 1件)

福中冬子「国内ワグナー文献」『ワグナー—シュンポシオン 2013』日本ワグナー協会編、東海大学出版会、2013年7月、164~171頁。査読なし。

〔学会発表〕(計 3件)

Fuyuko FUKUNAKA, “Why serialism failed,” the 2nd Congress of IMS, East Asian Association (Taipei, National Taipei University, October 17, 2013).

福中冬子、野平一郎ほか「シンポジウム：現代オペラの可能性と限界」日本音楽学会全国大会（京都、2012年11月4日）。

Fuyuko FUKUNAKA “The Anxiety of Modernist Influence,” the 19th Congress of IMS (Rome: Accademia Santa Cecilia, July 2, 2012).

〔図書〕(計 4件)

Fuyuko FUKUNAKA, “Re-defining post-war avant-garde music in Japan through de-fining Cage,” in *Contemporary Music in East Asia*, Hee-sook Oh, ed. (Seoul: Seoul National University Press, 2014), 181-210.

福中冬子編訳『ニュー・ミュージコロジ—』(東京、慶應大学出版会、2013年) 446頁。

Fuyuko FUKUNAKA, “Narrative, Voice, and Reality in Postwar Japanese Opera,” in Christian Utz and Frederic Lau, eds. *Vocal Music and Contemporary Identities* (London: Routledge, 2013), 116-132.

Fuyuko FUKUNAKA, “Hosokawa e Opera,” in *Lotus: La musica di Toshio Hosokawa*, Luciana Galiano, ed. (Milan:

Auditorium, 2013), 91-115.
〔産業財産権〕
出願状況（計 0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者
福中冬子（FUKUNAKA, Fuyuko）
東京藝術大学音楽学部・准教授
研究者番号：80591130

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：